

美術の窓 (132)

刊行年を偽った本

大和文華館館長 浅野秀剛

今年の10月10日(土)からあべのハルカス美術館で「錦絵誕生250年」を記念し、「春信一番! 写楽二番! フィラデルフィア美術館浮世絵名品展」を開催する。その出品作品に、大部の『千社札貼込帖』(図1)がある関係で、このところ、千社札の勉強をしている。千社札とは、千社(多くの社寺)参りした時の記念に堂の柱などに貼る紙製の札(制作者の略名、住所などが書かれている)である。宝暦(1751~64)頃から行われて次第に流行し、寛政期(1789~1801)には、同好者の連まで作られるようになり、19世紀に入ると、貼付用の札(題名納札)とは別に、同好者の間で交換するための観賞用の札(交換納札)が作られ、天保期(1830~44)には、売品の錦絵を凌ぐ豪華なものも現われてくる。フィラデルフィア美術館が所蔵する『千社札貼込帖』には、交換納札を中心に数千の千社札が貼り込まれているのである。

その千社札について書かれた最も古い本が『題名功德演説』であり、当然ながら、千社札の研究書・紹介書・図録にはその本が必ず登場する。今の本と同じく、江戸時代の本にも、巻末に刊記があり、刊行年が記載されるのが普通であるが、『題名功德演説』(国会図書館蔵)にはそれ

がない。しかし幸いにも、序文(図2)の末に「庚戌之春」とあるので、庚戌の年、すなわち、江戸時代後期であれば、寛政2年(1790)か嘉永3年(1850)に序文が書かれた(つまりその年か翌年頃に刊行された)ということが分かる。嘉永3年だと遅すぎるので、すべての研究者は『題名功德演説』の刊年を寛政2年序刊(序文にしか年記がない場合、そういう表記をすることになっている)、略して寛政2年刊としている。しかし、国会図書館が公開するデジタルコレクションでは、「嘉永3年序」となっているのである。果たしてどちらが正しいのか、国会図書館の「嘉永3年序」は単純に間違っているのかを私は調べることにした。というのは、寛政2年は早すぎるのではないかという疑問を抱いていたからである。かといって、嘉永3年は遅すぎるというのが直観であった。

結論を急げば、そのどちらでもないというのが、現時点での私の考えである。以下、要点だけを述べる。国会本の後表紙裏にある奥書には、頼まれて筆写したとして「高伴寛思明」の名がある。この人は読本作者・考証

家の高井蘭山(1762~1838)であるが、嘉永3年は没後12年となり、嘉永3年刊だと、成稿した後12年以上刊行されなかったことになる。また、蘭山が著した夥しい著作のなかで最も早いのは寛政3年刊のものであり、寛政2年は、蘭山が関与した本としては最も早いことになる。まあ、それは許容範囲としても、『題名功德演説』の後半に載る「衆牌」すなわち千社札一覧に、「左之四人古人連名」とあって「麴五吉」(麴町五丁目に住む吉五郎)の札が載っている。つまり、『題名功德演説』が成立した時点で「麴五吉」は亡くなっていたことになる。ところが、寛政11年(1799)4月に開催された千社札交換会「江戸大寄合」の引札(広報用チラシ)には「麴五吉」の名も載っているのである。「江戸大寄合」の引札を信ずれば、寛政11年には「麴五吉」はまだ存命であり、納札活動をしていたことになる。それは、『題名功德演説』の「古人」と矛盾する。極め付きは、「礪川亭一指写」とある「天愚孔平像」(図3)であろう。礪川亭一指こと礪川亭永理(1759~?)という浮世絵師については、私の古い友人である鈴木浩平氏の研究(興味のある人は『浮世絵芸術』100号、118号、『浮世絵大事典』を参照してほしい)

がある。今ここで、その概要を披露する余裕はないが、永理の作品が現われるのは寛政10年頃からであり、永理が一指と名乗るようになるのは享和2年(1802)頃なのである。したがって、礪川亭永理が寛政2年までに「天愚孔平像」を描き、それを『題名功德演説』に載せることはできない。かといって、永理の作画期は文化(1804~18)末頃までであり、しかも高井蘭山より年上なので、「天愚孔平像」が嘉永3年の直前に描かれた可能性はほとんどない。『題名功德演説』が嘉永3年刊だとすれば、やはり成稿した後、相当の期間、版刻されずにあったと想定しなければならない。

それでは、『題名功德演説』が刊行されたのは何時かということになる。紙数の関係で根拠は割愛させていただくが、私は、諸々の状況から判断して、享和・文化期(1801~18)と推定している。それでは、『題名功德演説』の制作者は(書物問屋、地本草紙問屋の制作ではなく私家版と考えられる)、何故序文を「庚戌之春」としたのであろうか。それについて確かなことは分らないが、『題名功德演説』には、寛政11年7月に出された、千社参り、千社札のグループ(講中、連)を取り締まる町触を意識し、それに対抗する意図もあることから、危険を避けるため、十数年早い干支を序文に入れたと私は考えている。寛政・享和期の洒落本・枕絵に、故意に早い刊行年を記したものが数点確認されていることを付記しておきたい。

現在でも、奥付に記載した刊行年月と、実際に刊行された年月がかなり異なる本がある。実際の刊行年月が奥付の記載より遅いのがほとんどであり、つまり、早く刊行したように装う(偽る)のである。社会を惑わすそのような行為を慎むべきであるのはいうまでもない。

図1(部分)



図2

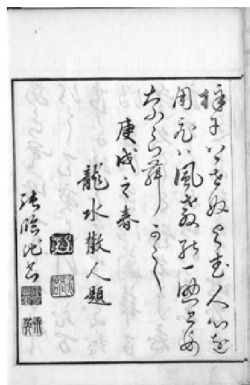


図3



季刊 美のたより No.190

平成27年 4月3日

発行 大和文華館